氏　　名	中川　郁太郎
学 位 の 種 類	博士（文学）
報 告 番 号	甲第６２５号
学位授与年月日	２０２４年3月３１日
学位授与の要件	学位規則(昭和２８年４月１日文部省令第９号) 第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	20 世紀前半期ライプツィヒにおけるカール・シュトラウベによるバッハ声楽作品の演奏―「ライプツィヒのバッハ様式」は存在したのか―
審 査 委 員	（主査）米沢　陽子（立教大学大学院キリスト教学研究科特任教授） ゾンターク，M（立教大学大学院キリスト教学研究科教授） 大島　博（立教大学大学院キリスト教学研究科兼任講師） 佐藤　望(国際基督教大学大学院アーツ・サイエンス研究科教授)

Ⅰ．論文の内容の要旨

（１）論文の構成

序章

第 1 章 神話か様式か——毀誉褒貶のシュトラウベ評

1. 1. トーマスカントル——オルガニスト、教育者そして指揮者として

1. 2. シュトラウベによるシュトラウベ

1. 3. 先行研究におけるシュトラウベの演奏に対する評価

1. 4. 「ライプツィヒのバッハ様式 Leipziger Bachstil」はあったのか

第 2 章「教会音楽」の実践——「カンタータ演奏」

2. 1. バッハのカンタータについて

2. 2. バッハの演奏実践の変遷におけるシュトラウベ

2. 3. 教会におけるカンタータ演奏

第 3 章　過渡期の演奏様式なのか———「カンタータ放送」

3. 1. 音楽の敵か味方か——新メディアとしてのラジオ放送

3. 2. カンタータ全曲放送

3. 3. 録音分析

第 4 章 後代への影響——「演奏家」シュトラウベのうけつがれる技術

4.1. 同時代そして後代へ

4.2. ひきつがれた演奏上の特徴

第 5 章 「ライプツィヒのバッハ様式」の位置——新メディアと変化の向こうに

5.1. 放送メディアと芸術

5. 2. バッハ演奏史における「ライプツィヒのバッハ様式」の場所

結論

（2）論文の内容要旨

本論文は、カール・シュトラウベ Karl Straube (1873-1950) がライプツィヒで行った、ヨハン・ゼバスティアン・バッハ Johann Sebastian Bach (1685-1750) のカンタータ作品の演奏によって、「ライプツィヒのバッハ様式」と呼ばれる演奏様式が確立されたのか否かを問うものである。

その問いに答えるための方法として、資料研究と録音分析とを行う。対象とするのは、ライプツィヒの教会で続けられたカンタータ演奏および 1931 年から 1937 年まで継続した、カンタータ作品のラジオ放送である。シュトラウベのバッハ演奏は従来、「ロマン主義的演奏」から「新即物主義的演奏」、さらに「歴史的演奏実践」へと移り行く過渡期に生じた一現象としてのみ捉えられてきた。本論文は、シュトラウベが発表した記事、演奏会の記録、さらにラジオ放送の録音の分析を通じ、その演奏行為の積み重ねを、バッハ演奏史の中に位置づけ直す試みである。

第 1 章ではまず、シュトラウベの経歴を辿り、若き日のシュトラウベが発表した文章を分析した。さらに先行研究を整理し、両極端に割れる評価を概観した上で、先行研究において「ライプツィヒのバッハ様式」と名指しされたものが、現段階では内実の伴わないレッテルにとどまっていることを確認した。

第 2 章では「カンタータ演奏」の資料研究を行い、カンタータ作品について概観した上で、バッハの演奏史を振り返った。シュトラウベについては、評者の立場によって評価が異なる。その原因の一つに、シュトラウベ自身の変遷が挙げられるが、その中にも変わらぬ軸として「教会音楽」があることを指摘した。資料調査により、カンタータ作品を集中的に演奏するという選択と、教会暦に即した演奏への意思とが明らかになった。

第 3 章では、「カンタータ放送」の資料研究および録音分析を行った。記録を分析することにより、新メディアに対する躊躇を拭い「カンタータ放送」に乗り出したシュトラウベが、初期に教会暦に即した演奏を徹底し、「全曲放送」を達成する過程を辿った。次いで録音を、ソニック・ヴィジュアライザーを用いて分析し、「カンタータ放送」を通じて醸成される演奏の特徴が示された。

第 4 章では、上記の特徴を、他の演奏家による演奏と比較することによって検討した。この分析を通じて、シュトラウベの演奏は同時代にあって際立ち、後代の演奏家にその特徴が引き継がれていることを明らかにすることを試みた。この分析の結果、「ライプツィヒのバッハ様式」が存在したと言いうることを確認するに至った。

第 5 章では、ラジオがもたらした変化に注目し、音楽の経験にもたらされた決定的な変容の狭間にシュトラウベの演奏があることを指摘している。最後に、演奏の積み重ねによって生まれた「ライプツィヒのバッハ様式」には、転換期における、過去と現在との連続性を示すものとして、独自の意義があると結論づけた。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

（１）論文の特徴

本論文は、ヨハン・ゼバスティアン・バッハの作品の演奏様式をめぐり、20 世紀前半期にカール・シュトラウベがライプツィヒで行ったカンタータ作品の演奏によって「ライプツィヒのバッハ様式」と呼ばれるものが確立したのか否かという問いを出発点としている。「過渡期に生じた折衷的な様式」としてのみ捉えられてきたシュトラウベの演奏をバッハ演奏史の中に新たに位置づけ直すことを目指した研究である。特筆すべき成果は、ライプツィヒにおける現地調査でトーマス合唱団寄宿舎所蔵の「モテット」のプログラムを精査し、先行研究で言及されることがなかったシュトラウベによる「教会音楽」の実態を、可能な限り明らかにしたことである。また「カンタータ放送」については当時の放送内容を精査し、ラジオという新しいメディアを巡る議論にも言及し、「ライプツィヒのバッハ様式」が醸成されていく過程を解明している。ソニック・ヴィジュアライザーを用いて可視化された仕方でシュトラウベと後継者ラミーン、リヒターらの演奏を相互に比較分析し、それらの特徴を以て「ライプツィヒのバッハ様式」は存在すると結論づけている。一覧表にまとめられた調査結果は、この分野における研究に多大な貢献をし得る資料であると言える。

（２）論文の評価

本論文は徹底した資料研究と演奏研究に取り組み、シュトラウベの功績を 20 世紀のバッハ演奏史に刻み直したことに大きな意義がある。一方、「ライプツィヒのバッハ様式」は存在するとの結論の論拠として、シュトラウベの演奏上のいくつかの特徴が後の世代に引き継がれていることを挙げているが、比較されている演奏例が少なく、また、著者も認めるように、一世代の内に大きく変化した部分やシュトラウベの影響下にない演奏に共通の特徴が見出されたことから、その存在を完全には証明し得ないのではないかとの指摘があった。著者は、またメディアがもたらす社会的変化をベンヤミンの論考を通じて明らかにしようとした。しかしベンヤミンの主眼は、芸術の「いまーここ」性の喪失がもたらす人間社会の危機の到来を糾弾することである。シュトラウベのカンタータ・ラジオ放送がもたらした影響と新メディアの到来による社会的インパクトを説明するために、ベンヤミンの論へ依拠することは、やや説得力に欠けるという指摘も審査委員からなされた。しかし、演奏を論じることには資料の限界があり、「ライプツィヒのバッハ様式」という明確な様式の有無という論議を別にして、本論文はシュトラウベのバッハ作品の演奏様式について、現在入手可能なあらゆる文書資料、録音資料を駆使し、音楽思想、音楽家の影響関係、音楽受容の様態といった様々な角度から検証し、これまで曖昧にしか語られてこなかった当時の演奏様式の輪郭を明らかにしたものである。博士の学位授与には十分な水準を満たしていると判断した。